

読書の価値観とその形成過程：

カフェ空間で「読書」をする人びとを対象として

Values of Reading and its Formation Process: Focusing on Reading Public in the Café Space

学籍番号：201421597

氏名：豊島 嶺奈

Reina TOYOSHIMA

メディア等で読書離れを目にする一方で、書店内にカフェを設置する複合型書店や、CCC運営の図書館など外での読書を推奨するような潇洒な場が増えてきている。このような新たな場所の登場は主な目的が読書なのか、場所の雰囲気なのかを曖昧にしている。また、インターネットの発達やタブレット端末の普及による情報の多様化も、どこからが読書かという、読書の定義を揺るがしている。従来までの読書の概念にとらわれず、人びとの読書の価値観とその形成過程を明らかにすることは、読書研究の新たな指標となりうる。

國本ら（2009）の調査では「読書とはいかなる行為であるのか」をフォーカスグループインタビューから明らかにした。その結果、読書は「対象」「志向」（“目的”と“背景”（価値観等）からなる）「行動」「作用」「場所」の五つの次元からなる行為であることが指摘された。しかし価値観の形成過程や五つの次元の関連性にはふれられていない。

そこで本研究ではわざわざお金を使い読書時間を確保しているカフェの利用者を、読書の優先度が高い人たちとし、各々の読書の価値観とその形成過程を明らかにする。

調査は、5名に複数回ライフストーリーを中心としたインタビュー調査を行った。調査の結果、ライフストーリーの中でも、①両親の教育・読書スタイル・家庭環境、②先生や友人から薦め・影響、③大人になってからの経験、④各々の夢・目標の4項目が、価値観形成に関わっていた。ここから形成される価値観としては、①知識の取得、②娯楽の享受、③読書行為そのもの、④コミュニケーションにまとめられる。この価値観とは、先行研究の「志向」のサブ次元である“背景”とほぼ同じ意味であり、「場所」等他の四つの次元に影響を与えていた。

以上のように「志向」が突出し、他の四つの次元に影響を与えている。さらに、この「志向」の中の“目的”にはライフストーリーに基づく各々の価値観（「志向」の中の“背景”）が影響を与えている。このことから、読書行為の定着には「志向」が重視され、その中でもライフストーリーやそれに基づく価値観が特に重視されている。よって目新しい「場所」や「対象」の提供は、根本的な読書離れの解消にはつながらない可能性が示唆された。

研究指導教員：後藤 嘉宏

副研究指導教員：照山 絢子